

## 6 19世紀末20世紀初中国政治と思想近代化の過程

張 寄 謙

19世紀末から20世紀初期にかけて、中国は近代化過程に臨む転換期を迎えた。

世界的範囲からいうならば、中国は旧い封建帝国から近代化に進む際、格別な苦痛を伴う摩擦の過程を経た。これは丁度世界資本帝国主義が近代的「血と火」プラス強権外交を以て「遅れた」国家と地域を隷従させる時代に会ったためだけでなく、中国が、何千年も挑戦されていない自慢に値する封建文明を有していたためでもあった。しかし19世紀中葉に向かいあった西洋世界は、もう一つの形態で、しかも同じく自己完成的で体系的な文明を有しており、また傲慢で、高邁な姿勢を持っていた。中国の西洋に対する軍事と外交の対抗は、一度たりとも勝利を収めたとは言いがたい。その他の各種の外来文化の吸収と融合に優れた民族と国家とは異なっており、旧い中国は心理的にバランスを取ることが難しかった。

このような情況を造り出したからといって、われわれは中国の封建支配者の保守性と閉鎖性ばかりを責めるわけにもいかない。事実上、中国文明が正確に西洋文明に対処出来なかったのと同じように、一部の歴史的文化的修養に欠けている西洋文明の代表者を自称するもの——一部の国の中国交渉を担当する政治家、中国に來た軍事家、外交家等、かれらも同時に、或いはもっと深刻に一つの世紀の長きに渡って、中国に対し、東洋に対する蔑視を持ち続けてきていたからである。

中国の近代化に向かう過程は、独自の民族的、歴史的特徴を持っていた。一部の特徴は、国民党支配時期に至って、また現在に至っても、重要な役割を果たしている。

### 一、軍事国防を強めることを以て政治近代化の前提とする

軍事国防上の近代化は、国家政治の近代化を意味するものではない。しかし広い政治の範疇からいうと、それは畢竟近代化の事物をもたらし、最終的に曲折に政治に影響を及ぼすことになり、歴史の前進を示したものと言える。

このような中国に対する深刻な影響のある特徴の形成は、周知の通り、近百年以来中国を囲む国際的環境に因るところが大きい。1840年から1900年まで、この60年間に、五回も大規模な侵略戦争に遭遇した。首都は二回も占領され、皇帝は二回も逃亡した。20世紀に入って、中国の受けた侵略戦争の時間と範囲は、19世紀より必ずしも軽くならなかった。戦争は八年間も続き、首都は占領され、国土の大半を失った。これは中国をして一刻も怠らずに、軍事国防を強めることが国家民族の主要任務であることを感じさせた所以である。

しかし、中国がこの点に気づいたのも、一つの過程を経ていた。

第一次アヘン戦争の爆発は、誠に初めて旧い中国の封建社会に「変わらなければ亡ぶ」という警鐘を鳴らしたのであった。しかし厳格な意味からいうならば、それは中国をして近代化に向かわせた一つの序幕でしかなかった。中国は必ずしも完全かつ正確にアヘン戦争の教訓を受け取っていなかった。

中国で初めて目を開いて世界を見たと言われている林則徐は、始めて欽差大臣の身分で廣州に到着してから、すぐ毎日『澳門新聞紙』を編訳させ、自らも『四洲志』を編集し、以て西洋各国の政治、軍事、経済、習俗を知り、国際現実の変化を知った。並びに絶えず自らが過去

に持っている西洋認識における正しくない見かたを修正した。かれが両広総督に就任してから、小規模な中英衝突が始まり、かれは公金を使わずに、別途に資金を集めて、西洋の大砲をいくつも購買し、同時に工匠を雇って外国の船艦を倣製した。1840年4月ごろ、戦船二、三艘を造っていた。(1) アメリカ人から「ケンプリッジ号」戦艦を購買し、また二つの2.5トンの帆船と一つのカナディアン・カヌーを買った。それで外国人は林欽差が「清帝国の海軍」を組織して外国の侵略に抵抗するのではないかと騒いだほどである。(2) かれは外国の戦艦が「朝は南、暮れは北、ただ水兵だけよく追尾できて、陸の兵士は俄に追跡できない」「夷を消滅するには船砲水軍を作らなければ、自ら失敗を選ぶことである」と悟った。かれは清政府が至るところから兵員を調達しても失敗の局面を挽回することができず、「遠くから百万の大軍を呼んできても、恐らく戦に臨めば敵の哄笑に供されるだけだ」と心配した。(3) かれは職を外されてからも、敢えて上奏し広東の税関の収入の十分の一を以て船や大砲を造るよう要求し、「夷との通商で得た金を以て、夷を防ぐのに使う」、「今後は製砲は必ず最も利くものを極め、造船は必ず最も堅いものを極めるべきだ」という。(4) 林則徐は中国において自らの軍事国防の力を強めることこそが、外国侵略に抵抗する根本の道であることを始めて認識し、しかも出来るかぎりの範囲内で実行した一人である。(5、6は略す)

歴史の発展の角度からみれば、人々が近代化のレベルに入るためには、まず客観的に自我を認識しなければならない。当時の世論における、アヘン戦争において中国が何故失敗したかについての評論から見れば、当時の中国社会はこうした認識がまだ十分ではなかったといえる。人々は一般的に戦争失敗の原因を、琦善等が敵の強い船と大砲を恐れて、外国と交渉する時に、妥協し投降したと決めていた。もろんこれは原因の一部であるが、しかし原因の全部ではなかった。このような総括は戦争のなかにおける失敗の原因を単純化しすぎて、正確に自我を認識することができない。

戦争は双方の物質の力と精神の力の競い合いであって、この物質の力は、武器や財力を除いて、また双方の人員の才能、素質、体等の要素を含んでいる。勿論琦善は臆病で無能だった。しかし人々は琦善の外交渉上におけるその才能、素質が殆ど義律(Charles Elliot)の相手にならなかったことを見逃していた。琦善は敵の戦艦が海口に迫っているのを見た以外に、来る敵の状況に対して、全くといっていい程無知な状態で、交渉に臨んでいたのだ。かれは明朝大国の外来夷人に対する蔑視の心理を持って中国の官僚世界の手法で相手に対処しようとし、その失敗は必然的であってもしようがなかった。その反対に、義律は大英帝国が育てた、中国に対して相当の知識を持っている植民官僚であった。かれは1834年に律勞阜に従って来華してからずっと広州に留まり、何度も中国の監撫大臣との接触の経験を有していた。

アヘン戦争失敗の原因問題について、林則徐も角度が異なっても、実質的に類似した見かたを持っている。イギリス政府の作戦意図と侵攻戦略を知らないために、林則徐は新疆に追放された時に、友人に当てた手紙で彼が広州任期において勝利を収めた原因をまとめて、次のように述べた。かれがアヘン禁止のために広州についてから、ただ「一枚の紙を持って夷を諭して徳威を告げた」だけで、何日もしない中に、イギリス人が全部のアヘンを納め、「その時外夷が天威を恐れて、船に積んだ全てのアヘンを悉く納めてしまって、戦わずに済んだ」という。

(7) 以後、イギリス軍が侵してきて、「広東の防備の堅実のために、しばしば夷の先鋒を挫いた」。

(8) このような見かたを広めていうと、つまり琦善が失敗した理由は、その臆病のためであって、自分が勝利を収めた原因は、強硬の態度を取って、敵の上を凌いで、威服させたためであったということである。しかし実際には、イギリス側の資料を参照してみれば、必ずしもこう簡単には言えないようである。義律がアヘンを納めることを認めたのは、一方において情勢に迫られた面があったが、一方において、イギリスの中国駐在商務監督である義律は、イギリス政府が将来きっと中国政府に全てのアヘンの賠償金を取るだろうと見ていたからであった。それでかれはイギリス商人にアヘンを出すように命令したわけである。(9) 義律の用意は林則徐が各外国の販売者のアヘンを収めたことを、すぐに中英政府の間の交渉関係を転換させて、将来の賠償要求のために根拠を残させることであった。しかし林則徐はこれらの動きを自分が出した一枚の「斥論」の力に帰してしまった。そして、イギリス政府の決定によって派出された第1次侵華イギリス軍の作戦案は、まず広州、アモイを封鎖し、そして舟山を占領して、直接に白河口に迫り、中国中央政府と直接に交渉するものであった。(10) 故に林則徐が未だ広東を離れていない時に、侵華主力イギリス軍は、広州を攻撃しなかった。この時の広州が保全されたのは、林則徐の監視のもとに、「広東の防備の堅実」によるだけではなかった。しかも浙江もこの時に全然防衛の準備をしていなかったのではなく、むしろイギリス軍が舟山を攻めて、最後に定海を占領する強い意志が作用したところが大きいと言ったほうがよいかも知れない。

武器は戦争のなかで、決して唯一の決定的な要素ではないが、しかしこれ以後、中国の多くの人々において一つの正論を形成した。つまり敵の武器が我に優れていることを認めて、外交交渉のなかで外交手段を以て問題を解決するのが投降に等しいという認識は、その後清朝廷における官僚の評価を左右する主流となった。清代中国の初めてのイギリス駐在公使兼フランス駐在公使郭嵩焘は、即ちこのような正しい議論のなかで、政治生命を奪われたのである。(11)

中国近代歴史の発展からみれば、19世紀60年代は、中国が本格的に近代化に邁進した時期であった。60年代の中国では、三つの重大な変化が起こっていた。

## I 西洋の資本主義技術を習い、軍事国防や民間企業や近代海軍を建設すべきことを悟り始めた。

第二次アヘン戦争の敗北は、中国朝野に与えた衝撃は、遙に第一次アヘン戦争を超えていた。続いて起こったのは一連の辺境危機であった。なかでも中国中央政府にとって、最も刺激的であったのは、1874年に日本が琉球難民事件を口実に、台湾に武力侵攻したことである。しかも日本側は北京の交渉に際して、さまざまな脅しと強要を施して、中国政府に対して絶大な刺激を及ぼしたのである。「明らかに彼の理が曲がっていると知りながら、我が兵備の虚に苦しむ」。(12) つまり、厳しい現実で、中国をして外国の侵略に対して深い認識を得させたばかりでなく、その上に割と客観的に自国の実力を国際世界において知らしめるようになり、このような背景を出発点にして、中国は始めて近代化への道を求めるようになったのである。こうして清政府は1865年前後から軍事工業を創立することを主とした、よく知られるいわゆる「自強」活動を急いだのである。次々と民間企業を創設することを主とした「求富」活動を進め、並びに北洋

海軍を主体とする近代海軍を建設する方針を確実にしたのである。もちろんこれは第一次アヘン戦争より歴史が中国に軍事国防の必要を示してから、既に2、30年の歳月が立った後のことであった。

1865年から1895年における近代化の発展は最も全国の人々に注目され、厚い希望を託された時期であった。甲午の敗北、北洋海軍の覆没、李鴻章が辞職に追い込まれ、その発展は一連の事件によって大きな打撃を受けたが、しかし清政府が引き続いて海軍をも含めて、近代化の歩みを進めて止まなかった。

この普通、洋務運動と呼ばれる活動は、西洋の国家が民間資本から資本主義の道に進むのとは、完全に異なる。これは封建政治体制の指導の下に、封建生産関係と平行する近代機械化の生産力を採り入れ、ある種の資本主義の生産関係をもたらしたものが、しかしそれは経済的な基盤から中国の社会を揺るがすことがなく、まして封建的政治体制に対する何らかの影響を与えるには及ばなかった。しかし中国社会の発展過程からいうならば、畢竟これは未だかつてなかった進歩であり、同時に民国時期の工商業の各方面に渡って、薄弱ながら基礎を築いていたものであった。

## II 清中央政府における新しい機構の増設

列強の「建議」のもとに、清中央政府の政治機構が変化を現した。それは即ち1861年1月の総理各国事務衙門の設立であった。これは在華列強の要求に応じて設立した外務省に相当する部門である。

その設立の清中央政府に対する影響は、遠く雍正朝（七年、1729）が軍機処を設立するより、大きかった。軍機処の設立は、只内閣の職権を弱めただけで、皇帝の権威が依然としてこの上なく高かった。しかし総理各国事務衙門の設立によって、実際は列強が直接に中国の対外交渉の政策に影響を及ぼし、甚だしく干渉を行うことが可能になった。これは中国中央政府の権利を、従って皇権をも弱めることになる。だからその設立は中国中央政府がやむを得ず半植民地化された象徴と見なされるのである。総理衙門の設立は、最初も軍機処のように、一つの臨時的な機構とし、将来「軍務が肅清し、外国事務が簡単になれば、即ち撤廃して」「以て旧い制度に符する」と考えられていた。<sup>(13)</sup>しかしこれは軍機処と同じように、ずっと撤廃されなかった。ただ『辛丑条約』（1901）に至って、また諸国の要求に応じて、1902年から総理衙門を外務部に改めた。これは各部の首に列して、その地位が中央政府のなかに日にまして重要になっていたことを物語った。

総理衙門の衙署はその他の内閣各部のように、紫禁城内の外廷に設けていたのではなく、皇宮の外に設けられていた。<sup>(14)</sup>外国公使の往来が比較的に自由にできる。首任の総理大臣は皇室の恭親王奕訢によって担任される。かれは当時イギリスが意識的に近づき、支えようとする人選である。総理衙門の権限は外交を遠く超えて、全ての外国関係の事務（通商、税関、外国顧問の招聘、外国軍事教諭等）及び洋務派がやる各種の洋務（軍事工業、民間企業、海軍の建設等）を含んでいた。その子機構のなかのもっとも注目を要するものは、税関である。中国の税関を巡って、1853年英、仏、米の三国は、小刀会の上海占領を口実にして、非合法的に上海

江税関を手に収め、1859年にさらに進んで全国税関の行政管理権を掌握した。それで税関の総署が北京に移ることになった。職員は総稅務司から各税関の稅務司に至るまで、また補佐、書記を含んで、皆中国政府に雇われるのであった。しかし20世紀30年代に至るまで、依然と大部分は外国人によって担任された。なかの総稅務司の役職は、1950年に至っても、依然と外国人（すでに国民党と共に台湾に赴いた）の担任であった。最後の一回を除いて、全てイギリス人による担任であった。総稅務司赫德（Robert Hart、正式の任期は1863～1908）は、税関で52年間も働き、時々総理衙門の諮問を受ける高級顧問となっていた。かれはまた直接に中仏戦争の終結と、中葡リスボン条約におけるマカオ問題の調印等に関与していたのである。全国税関総署の設立は、清代の粵税関にとって代わった。これは資本主義の効率的な管理制度を中国に将来し、また粵税関の数百年間の不正横領、無効率の習わしを終わらせた。総理衙門は下屬の税関総署、郵政官局等を含んで、中国にとって何を意味しているのか。歴史の進歩は往々にして「善」の恩賜に伴ってくるというよりも、「悪」と共にやって来るのだ。もし一度「悪」勢力の道具になったものを、つまり当年侵略者の剥奪のなかで収めた成果を、自らの功績とばかり見なしては、歴史への無自覚だと言えよう。われわれは自ら歴史の眼光と度量をもつべく、この歴史は我が民族に対して屈辱的で、不名誉な一面を有すると同時に、誇るべき一面をも有することを認識しなければならない。諸多の外国侵略や圧迫を受けた国にとっては、近代化への道は、決して田園的で交響樂的な雰囲気の中に行われたものではなかった。相当多くのものは圧迫と奴隸として使用されるなかで獲得したのである。圧迫者、敵に学んだものである。これは中華民族が絶えず烈火のなかで新生を勝ち取ってきていることを物語っている。これも中国近代化の過程における特徴の一つと言えよう。

### Ⅲ 中央と地方関係の変化・新しい軍閥官僚階層の形成

19世紀50～60年代、太平天国及び各地の人民一揆、騒乱を鎮圧し、洋務事業を進めるなかで、曾国藩の湘系と李鴻章の淮系と左宗棠の旧湘系を代表とし、封建地域性を連帯とする官僚軍閥集団が躍り出た。かれらはそれぞれに在華外国勢力の程度の異なった支持を受けて、政治的実力を伸ばしていったのである。客観的に中央政府もかれらに譲歩をし、かれらの支持を求めざるを得なくなっていたのである。このような階層の形成は、事実上、民国以後、蒋介石支配時期に至っても、一部の政治、軍事権力を掌握する人々の基礎となっていた。かれらの活躍は、主に洋務のチャンス、権力を持っている（地方行政、軍政を一身に集める長官）という条件に恵まれていたからである。これも中国が新式の工業企業を設立する条件の一つであって、大多数の企業は官の政治的背景を持つ人物によって、初めてその管理者に適任する。かれらの独占支配の下には、民間資本が進入できない。ある人々は他の勢力に頼ったり、ある人々は資本を外国の在華の洋行或いは工業企業のなかで混じっていくしかない。思想体系の上からいうならば、このような人々は満族の親戚や貴族たちよりは一步進んでいて、ある程度の近代化傾向を有している。中国近代化の萌芽要素は、同時に封建軍閥官僚のなかから生まれたのである。

注意すべきなのは、このような階層の形成は、清朝廷が入関以来作った満族を主体とする支配に対する挑戦ばかりでなく、同時に万世一系・天賜皇権の伝統観念に対する挑戦でもあった

ことである。ここで曾国藩、李鴻章、袁世凱3人の事例を以て説明してみる。

曾国藩はかつて太平天国を鎮圧した時、かれの権勢が大きかったために、深く清朝廷の妬みを買った。1864年、南京が湘軍に占領されて、李秀成が捕虜になって、李は民族矛盾を利用して曾国藩を説得しようとし、かれに皇帝の位を勧めた。曾国藩は連夜李秀成に供述書を書かせて、詔勅を待たずに、すぐ李秀成をその場で処刑した。李の供述の最後の部分は壊されて、その原稿は清朝廷の再三の催促にもかかわらず、上納しようせず、家の中に秘蔵されていた。同年曾は南京で、湘軍を大幅に削減した。

李鴻章の清皇室に対する尊重は、曾国藩と較べると、遙に淡泊なものであった。1895年の甲午敗戦、かれ停職されてから、密かに圓明園を遊覧した。圓明園はこの時既に廃棄されていたが、しかし依然と出入り禁止の御苑であるため、李は3ヶ月分の給料にあたる罰金を課された。義和団時期、1900年の夏、孫中山は香港総督卜力（Henry A. Blake）の支持を受けて、両広で独立に共和国を建設しようと図った。時の両広総督李鴻章を大統領にし、孫中山を総理にする。孫中山が宮崎寅藏を広州に派遣して李鴻章の側近幕僚劉学詢と相談した時、李は賛意を示し、同時に双方の商談を継続することを約束した。しかしその後間もなく清政府が命令を下して、李を直隸総督に任命し、各国と和議を協議するのを担当する。李はすぐ広州を離れて上海で動静を見る（列強は最初李の談判代表を任ずるのを反対）。袁世凱はすなわち武昌一揆軍を道具とし、以て清皇室の退位を迫る。

李鴻章、袁世凱は清皇室の帝位を蔑視し、自分がそれにとって代わることができると考えていた。封建の束縛を脱する角度から言えば、進歩的であるが、しかし一揆の農民にもこのよう胆魄を持つことができる。李、袁の行為は自らの野心から出たものであって、かれらの皇権主義思想の暴露だと言うこともでき、近代化思想の影響を受けたものだと言い切ることが難しい。但しこのような変化は少なくとも一般の百姓にある皇帝の万世一系観念の打破を促し、これ以後帝制は中国での市場を確保できなくなる。これは一つの進歩ではないとはいえないだろう。

## 二 中国思想近代化の発展過程及びその特徴

思想が一つの文化のなかの最高階層である。それは各種の事物のなかを貫きながら、一般事物の外に昇華する。思想は文化の精髓なのである。

船堅炮利は文化の中の一部であり、比較的浅い一部分で、比較的に学び易い一部分だと言える。中国がまず西洋に学んだ船堅炮利は、十分に成功していなかったにもかかわらず、しかし中国固有の基礎と較べると、やはり相当多くのことを身につけて、その後の中国の工程技术の上の発展に一定の基礎を築いていたのである。どんな文化にも、皆粕と粋が混在する可能性があり、ただ比例成分が異なるに過ぎない。

率直にいうならば、1840年以後20世紀初めに至るまで、中国が本当に接触した西洋の資本主義思想の粋の部分は非常に限られたものであった。各国から最初に中国の沿海地域に集まってきた人々をみても、かれらが中国の普通の人々にもたらした印象は、その国或いは民族の最も優秀で、最も外国に展示してほしいものではなかったのかも知れない。また外国人と接触し相

互理解をするには、言葉と文字を必要とするので、その時の状況から言えば、中外双方ともこのよう状況を備えていなかったのである。

従って、全体の状況から見れば、近代以後中国思想の発展と変化は、まだ半ば閉鎖的な状態の下で進められたのである。このような思想家のなかに、ただ極く一部の人が外国に長く滞在しただけであった。また洋行や買弁の出身であっても、或いは外国から中国に來た人々と割と多く接触した人であっても、外国に対する知識は極めて限られたものであった。少なくとも19世紀末ごろ以前では、かれらの思想は基本的に地主知識人的な開化の道に沿って押し進められたものである。

## I 経世致用の学から「夷の長技を師して以て夷を制する」の提唱へ

アヘン戦争以前、知識人の一部は、既に清半ばの文字獄の脅威から解放され、もはやもっぱら考据訓話の学門に専門に従事して、歳月を消耗することはなかった。かれらの共通の特徴は、経世致用の学を提唱し、例えば水利や漕運等社会経済に関する問題を研究し、一部の人はまた辺境問題の研究に取り組むということである。経世致用の学を重視する流れは、清代から民国初期に至っても尚継続されていたのである。

アヘン戦争後、魏源が林則徐の『四洲志』の基に編著した『海国図志』は、海外（例えば日本）にまで影響を及ぼした書物である。かれがこの書の「叙」において説いたのは、この本は「夷を以て夷を攻めるために作り、夷を以て夷を款するために作り、夷の長技を師して夷を制するために作った」ものであり、つまり、当時の清政府が軍事国防工業を建設する指導思想となったものである。左宗棠はこの本に序を作り、李鴻章は公に外交をする場合「夷を以て夷を制する」政策を取るべきだと明言した。

## II 西側資本主義民主制度に学び新しい政治体系を建立する幻想を太平天国に寄せる

西側米、英、仏等の国は、かつて太平天国が南京で政権を設立した当初、太平天国との連携を考えた。もちろんかれらの外交、軍事関係者の出発点は、政治のためにあって、宣教の出発点はキリスト教の影響を拡大させるためにあった。後ほど、彼らは相前後して元々の打算を放棄した。清代の知識人のなかに、太平天国と関係した人は王韜、洪仁玕と容閔の三人である。王韜はかつて黄陂名義で太平天国のある指導者に手紙を送り、清政府に追及され通達されて、香港に逃亡した。かれが便りを書いた本当の意味は明確ではない。かれは当時上海にいる宣教師が作った墨海書館の下級職員で、就職の口を他に探そうとして、それで太平天国と連絡したのかも知れない。

洪仁玕と容閔二人は、身分が異なり、文化思想のレベルの差も大きい。容閔はアメリカで長い間教育を受けて、幼いころからキリスト教をまじめに信仰していた。洪仁玕は農民知識人で、香港を経由した時、資本主義制度にも取るべき一面があるのを見いだしたために、(15) 洪秀全にそういう面を採り入れようと勧めたが、採用されなかった。

容閔は1853年以後、一度帰国して上海の外国商社に雇われて、数回に渡って生糸と茶を購買に太平天国地域に入ったことがある。1860年末、アメリカ宣教師と共に南京を訪問し、かれは

太平天国に七つの比較的系統的な、西側資本主義制度の優れた点を取り入れて政治、軍事、経済と文化教育を改革する建議を提出した。かれは太平天国に一つの「文明政府」を建設するよう望んだのである。(16) 経験豊かな人を迎えて政府の各部門の「行政顧問」とし、正規の軍事制度に従って、「一つの良好な軍隊を組織する」、高級軍官を育てる武備学校と海軍学校を設立し、「銀行制度を確立する」、度量衡基準を定め、「各級の学校制度を制定する」「各種の実業学校を設立する」。太平天国側でかれらの接待を担当したのは幹王洪仁玕であった。容閔は太平天国がかれの建議を採用する用意があるという返答を得ることができなかった。かれは太平天国の封爵を謝絶して帰途に就いた。その後容閔が国家の現在に何か建議がないかという曾国藩の諮問に答える際に、かれはただ機械製造業を建設する一件を指摘しただけだったことを較べてみると、かれは中国の革新の希望を太平天国にかけていたことが分かる。かれは一つの政権が宗教信仰と政治信仰において全て玉皇大帝と咸豊皇帝を放棄し、キリスト教の神エホバに依ることができれば、政治制度においてもきっと西側資本主義民主制を受け入れられると考えて、上述の建議を持ち出したに違いなかった。しかしかれは、太平天国の創始者洪秀全が本質的封建帝王思想を超えることができず、しかも多くの人々がかつて善良な希望を寄せた人間天国の国度に、「文明」的民主制度を実現させようとする遠見を持っていなかったことを知らなかったのである。

近代化観念の受入れ及びその実現は、畢竟相応の段階を飛び越すことができない。人々の思想的レベルの上昇と物質生活のレベルの向上とは、二つの範疇のできごとである。純粹の農民的思想範疇を以て、資本主義の政治体制とその文化思想を受入れることは出来ないのである。

### Ⅲ 帝国主義の在華特権反対、重商政策を主張、西洋の議会制度を求めはじめる

19世紀70～80年代に入って、中国知識人のなかで、変革を主張し、普通維新と称される思想が形成されつつあった。かれらの思想は過去と較べると明らかな深度を持つようになった。このような人々のなかに、相当多くの代表的な人物がいる。例えば薛福成、馬建忠、鄭觀応、陳虬、何啓等がそれである。康有為、孫中山もこの時に頭角を現しはじめた。かれらの思想のなかで注目すべき要点は次のようである。

- (1) 帝国主義の在華特権を反対する方面において、かれらは後の中国共産党のように、明確に外国が中国に強いた調印は「不平等条約」であることを提起しなかったが、しかし外国と中国が調印した条約は、当時「尋常のようにみえるが、無限な患を残すもの」として、主に二つの点を、つまり「一つは、一国が利を獲得すると、各国が共にそれを獲得するようになること」「一つは、西洋人が中国に居を構えながらも、中国官僚の管理を受けないこと」を指摘して、(17) 不平等条約の要害を擲んだのである。
- (2) かれらは国家政策、立法方面から民族工商業を保護することを主張する。「商部」の設立、「商務学堂」の建設、工商業者が自発的に組織し会社を経営することの許可、(18) これらの主張は萌芽中の民族資本主義の要求を代表し、実行できれば、中国をして早く資本主義に入らせることを促すことになる。
- (3) かれらの主張のなかで、もっとも注意されるべきは、大部分の人は、皆資本主義国家に

倣い議院を設けて、彼らが議院の国家政治生活に働く作用を理想化してとらえた点である。例えば鄭観応は、「故に議院があると、腐敗の君主が淫らにできないし、威張った大臣たちもその権力を欲しがままにできない。大小の官僚も自らの責任を卸すことができない」。従って下層人民の反抗闘争を避けることができる。議院を設けて、「数代を経て亡び、一つの王朝で滅ぶ」ことを避けることができるという。(19)

もちろん、かれらのなかには、西洋の議会制度の本質を比較的に確かに認識する人もいた。例えばフランスに長年留学した経験のある馬建忠は、西洋国家の議院が飾り物に過ぎないと考えていたのである。かれはイギリス「上下議院はただみだらに空談に耽る」、議院は首相等の重要閣僚のために、「難しい局面に会った時、議院を口実にする」だけのものであるという。(20)

- (4) かれらは明確に変法をすべきだと指摘した。かれは変法が歴史発展の趨勢であるといい、「天道が数百年に小変をし、数千年に大変をする」、「変を好むに非ず、時勢がそうさせた」と言う。(21)

#### IV 変法維新と革命

19世紀90年代に入って、中国知識界には重大な変化が起り、人々は座って道を論じ、思想を談ずることから、起きて同志を集めて集団的な政治運動を押し進めるようになった。こうして戊戌運動と辛亥革命運動を起こしたのである。

1898年以後、双方は立憲か革命かを巡って長い間争った。最後は清政府がこの論争を片づけてしまった。清政府は穏やかな路線を主張する群衆に対しても、断固として鎮圧する態度を取ったため、群衆たちを相前後して革命に転向させたのである。こうして革命が結局最後の勝利をかち取った。

一般的にいうと、革命の思想が革命の行動に先んずる。しかし中国では恐らくこの法則に忠実に沿って発展していたとは言えなかった。19世紀90年代に至って、初めて西洋資本主義政治思想が相次いで中国に紹介されるようになった。これはもちろんまず嚴復の翻訳し出版した8つの著作を推さなければならない。なかでも社会にもっとも影響を及ぼしたのは、かれが訳した『天演論』を置いては他にない。『天演論』は自然界の優勝劣敗の淘汰法則を紹介し、中国に対しては1つの震動であった。但し嚴復の訳文が読みにくかったので、一部の重大な影響を起こすべき著作が、相応な働きを示さなかったのである。例えば、かれが訳した J. S. ミルの『群己權界論』は、社会的に殆ど反応がなかった。しかしこの本は日本では禁書とされている。(22) 原因は J. S. ミルのこの本のもとの書名は『自由論』という。嚴復はこれを分かりにくい書名に直したので、当然、社会的に反響を引き起こすことが難しく、まして当局の禁止を受けることになることもなかったのである。本の翻訳は辛く、難しい仕事だから、同時代の、西側資本主義を研究する分量のある著作を紹介する人は少なかった。だから、ある方面からいえば、辛亥革命が清王朝を覆して勝利を収め、中国を支配する何千年の封建専制制度を終わらせたが、しかしそれは資本主義民主共和国を建設する面での準備においては不十分であった。

## V 辛亥革命以後世界の各種の流派の進入

辛亥革命によって、禁固思想の鎖を閑いた如く、世界中の各種の思想流派が次から次ぎへと中国に流入した。そのなかで、一度阻害的な働きを果たしたのは袁世凱の北洋政府時期であった。この時、かれは思想の異端と決めつけた人を皆処刑してしまったのであった。

こうしてマルクス主義が現実の革命闘争の武器として中国に伝入して、人々に受け入れられるまで発展し、中国共産党が成立して、中国思想の近代化の問題は新しい段階に入ることになる。

以上の叙述で、われわれは中国思想の発展のなかに、いくつかの特徴を見出すことができる。

### 1 近代中国思想の発展は実を務めることに傾くこと

この点は、中国伝統文化の自国と外来文化に対する態度とでは、差異があるようである。中国は世界において火薬の発明者である。但し中国の支配者はこの道に従って深入りして、自国の武器を改造していくことをしなかったようである。しかし中国は世界的に知られた花火の製造国になっていた。中国は外来の純粋なイデオロギー的な範疇に属する仏教文化を受け入れることができたし、明清の時、來華のヤソ会士は、深く中国知識界と朝廷の尊重を受けた。かれらもたらしたのは生活に関わらない天文、地理等の科学知識であった。康熙、雍正、乾隆朝廷内に仕えている外国宣教師が従事したのは、絵画芸術と建築芸術等であった。しかし近代以後はちょうど反対の状況になった。中国がまず歓迎した外国人は、軍事技術者であり、軍事教練、軍事顧問であった。学術の分野及び社会的風潮においても、理工を重視し、法文を軽視する。自然科学の分野においては、応用科学を重んじ、基礎科学を軽んずる。

### 2 相当長期間において、「自我」を求める過程を経ている

ここ百年以来、西洋の政治、軍事、思想文化、生活等各種の波の衝撃を受けて、中国は極端な高慢、自信から、多くの問題について、自国に対して皆否定的態度を持つという溝の中に陥ってしまった。いつも元々の「自我」を否定しながら、新しい「自我」を求めてきた。何が本当の中国文化なのか。中国の国際社会における位置はどうか。このような問題は、ずっと中国を悩ませてきている。

### 3 中国思想の近代化の発展は全国的にみてアンバランスである

中国は国土が広く、地域間の差や、各階級、階層、群体の間の差異が非常に大きい。あらゆる問題は皆そうである。この問題は昔から同じような現象がすでに存在し、近代以後になると、その差異がさらに大きくなっていったのである。従って、全国的に見ると、中国における近代化の任務の完成は、まだまだ大変難しい課題である。